

# ホテル プウサン

国際学術連合 (ICSU) の能力開発委員会に初めて参加するため、緑濃い6月のパリに赴いたときのことである。ICSU 事務局が宿を予約してくれるというので頼んだところ、本部に近いプウサン通りに面した同名のホテルが指定された。

17世紀のフランスの画家、Nocolas Poussin にちなんだ名前が付いているが、プウサンの絵を見た記憶はあまりない。バロック風の豪華なホテルかもしれないと期待して辿り着いたところは、うっかりすると見落とすような、三ツ星の小さなホテルだった。

歩道から二段上がってドアを開けると、そこに小さなロビーとフロントが並んでいた。中は修学旅行らしいアメリカの高校生でごった返していたが、ICSU の客は常連らしく、フロントのお嬢さんはさっと鍵を渡してくれた。宿帳の記載など、面倒なことは一切抜きである。

外が見える古風なエレベーターで3階に上がると、廊下に面してドアがあった。それを開けると、二つの部屋の入り口が向かい合っていた。その片方のツインの部屋が、家内と一緒に久しぶりに訪れた花の都パリの思い出の宿ということになる。

中はかなり質素だった。バスルームも狭く、タオル掛けを兼ねた金属ヒータに腕が触って、家内が早速きゃつと悲鳴を上げた。6月のパリはかなり暑い。エアコンのスイッチを入れたところ、驚くような轟音で部屋が唸りだした。冷たい風がわずかに吹き込んでくるから、機械は働いているらしい。

ここに三日も泊まるのかしらと、家内は不満顔である。確かに ICSU 割引で経済的ではあるが、思い出もまた、お金の換えがたい価値がある。比較的近いニコードパりに予約の電話を掛けてみると、今日は日曜なので明日掛け直して欲しいという。かくしてパリ最初の夜は、エアコンの騒音 BGM にのって暮れていった。

翌朝、朝食のために下へ降りる。一階の朝食コーナーは高校生に占領されていたので、地下の食堂にゆく。10畳ほどの小部屋にテーブルが四つほどあり、入り口のテーブルでは、ワイシャツ姿の白髪の紳士がフランス語の新聞を読んでいた。家内と隣のテーブルに腰を下ろしたところ、メイドがやってきて何か言ってくる。判らないのできょとんとしていると、隣の紳士が新聞から目を離さずに“Room number”と呟いた。ああそうかと思い、部屋番号を告げると、何やらフランス語に通訳してくれたらしい。

パンとカフェオレの簡単な朝食が終わった頃、色黒のアフリカの紳士らしい二人連れが、背広姿の正装で入ってきた。その二人は、入り口の紳士と前から知り合いらしく挨拶を始めた。その会話から、隣の紳士が、能力開発委員会の委員長を務めるレーダーマン博士だと知った。私も早速立ち上がり、自己紹介を始めたところ、ああ貴方がヒデオかと、何か旧知の間柄かと思うほどの親密さに変わってしまった。

レーダーマン博士 (Leon Lederman、1988年ノーベル物理学賞) は、向かい合わせのシングルの部屋に泊まっていた。ノーベル賞受賞者が黙って泊まるホテルに、ノーベル賞など無縁な貴方が難癖付けることはないわよねと、家内の論調も急変してしまった。かくして、エアコン BGM も火傷ヒーターも、プラスの思い出に変わってしまったわけである。

フランス画壇アカデミズムの基礎を築いたプウサンの思いが、ひょっとすると科学アカデミズムの本拠地に近いこの小さなホテルで今でも生き続けているのかもしれない。

大橋秀雄 (第5部会員)